

藤原智美

fujiiwara tomomi

29

74

25

91
T.O.

運転士

運転士

藤原智美

fujisawa tomi



講談社

運転士

1992年8月20日 第1刷発行
1992年10月21日 第3刷発行

著者 藤原智美

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一―二一〇一

文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五〇四

書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六二二

書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

© Tomomi Fujiwara 1992. Printed in Japan

ふじわらともみ
藤原智美

1955年、福岡県生まれ。

明治大学政経学部卒業。

以後、フリーの雑誌記者、コピーライター。

「王を撃て」で小説家デビュー。

「運転士」で第107回芥川賞受賞。

運轉士♣目次

運
轉
士

7

王
を
撃
て

107

装画 浅野竹二

装幀 菊地信義

運轉士

運轉士

二本のレールがカミソリのように光る。フロントガラスに粉雪がスプレーされる。勾配が徐々に大きくなり、運転士は誰かに背中を押されているような感覚を覚える。傾斜角千分の三十五の下り坂だ。

レールを断ち切るように前方にぼっかりと開いた暗い穴が、少しずつ大きくなっていく。運転士の目は穴に吸い寄せられ、ハンドルを握る右手にも力がこもる。スピードがひとりでに増し、電車はレールの上を滑るように進む。運転士はハンドルを少し戻し速度を抑えにかかる。しかしそれでもスピードは衰えることなく、電車はまっしぐらに進む。

ヘトネルの奥に隠された巨大な磁石には誰だって抵抗なんかできっこない

両側の灰色のコンクリート壁がせり上がり、運転席に覆いかぶさってくる。車体を突き抜け運転席に侵入する音が、厚い重低音に変化すると、運転士は心の中でカウント・ダウン

ンを開始する。

〈四、三、二、一、ゼロ〉

あつという間に地上の光が吸い取られ、列車は地下へと突入した。途端にスピードが倍になったような錯覚が起こる。それは運転士にとって心地よい錯覚だ。まるで地上四階の高さから地下十階へといつきに滑り落ちていく感覚——。ワイパーのスイッチを切る。前照灯が闇をまっすぐに切り裂き、天井に等間隔で設置された隧道照明灯ずいどうが、光るテニスボールのように後ろへと飛んでいく。電車はさらに地下へと軌道を突進する。時刻は午前八時三十一分四十秒。

……フロントガラスの右斜め上あたりに、まるい発光体が夜空に飛来したUFOのようにふわりと浮かんで見える。停車駅の明かりだ。それは右斜め上からしだいに真ん中へと移動しながら大きく広がり、ついに電車全体をその中にすっぽりと包みこもうと待ち構えている。

〈駅はいつでも午前三時のコンビニエンス・ストアーだ〉

電車はホームの直前まで迫っている。駅員の携帯灯が運転士へ合図を送る。彼はエアブレーキのゲージを最大の四にする。それに反応して電車はすぐにスピードを緩める。そ

のとき、彼の頭の中できまってまゐる大きな風船が床に落ちて跳ねるのだ。

へブレーキのショックは、風船が床に落ちて跳ね返るくらい滑らかなものでなければパーフェクトとはいえない。

彼はゲージを三に戻し、ブレーキの圧力を少し解除する。このタイミングこそがポイントだ。ゲージ四が長すぎると、電車は腰を撃たれた鹿のようにショックを受ける。その反対に短すぎると、今度は停車位置がずれて、ホームでいったん停車させた後、バックさせるというぶざまなことになってしまう。

へどっちにしてもそれは運転士としての最大の恥だ。

彼の想像力がつくりだした風船はいま、二度目のバウンドをして、空中から高速度撮影されたフィルムのようにゆっくりと落下していく。ゲージは二だ。ホームの柱の流れがゆったりとしたものになる。停止位置は残り十メートルを切る。ゲージを二から一へ、さらにゼロへ向かって下げる。停止位置の一メートル手前でブレーキ圧力がついにゼロになる。その瞬間、これまで抑制されていた運動エネルギーが解放されわずかに息を吹き返す。電車が最後の一メートルを滑っていく。風船が床に静止する。

電車が止まった。停止位置と五センチの狂いもない停止。

へパーフェクト！

教則本によれば一段制動階段払い。しかし運転士にとっては、バルーンのスローモーション落下。彼の頭のなかでいつもバルーンが落ちていく。

発車合図のブザーが車掌から届いた。ハンドルをニュートラルから力行りっこうと呼ばれる加速位置までいっぱいに引くと、車体がガツンと揺れゆっくりと動き出す。電車は再び光から闇の中へと帰っていく。

光があふれたホームでは運転席は死んだも同然だけど、トンネルに戻った途端にそれは生き返る

……運転席に置かれた行路表は通過駅を結ぶ赤く太い線がしっかりと書きこまれ、専用の小型ライトに照らされている。計器パネルはそれぞれ、緑、青、黄色の光を放っている。柔らかな光が手元だけに集まるこの明りの配分が、運転士は好きだ。

行路表に記された定時と、計器パネルの横に置いた懷中時計の時刻とに開きが出ている。始発から六つ目の駅ですでに遅れは五十秒に達していた。次のホームの明りが見えてくる。嫌いな右カーブ右ホームの駅だ。左カーブならまだ見通しはきくが、右カーブはホームの客が見通せないのだ。彼は無意識のうちに身体を左側に寄せ、電車がホームに入る

前に、カーブの突端にいる駅員の携帯灯を確認しようとする。しかし、ホームの端っこを歩く黒い学生服を着た高校生のグループが視界をさえぎって見えない。運転士はホイッスルを吹くが、高校生たちはまったく避けようもしない。駅員が軌道に携帯灯を振り出したおかげで、運転士はそれをやっとうにか確認する。

二度目のホイッスルを吹かなくてよかった。できればホイッスルは吹きたくない。下品だ。

ホームのエッジを切るように電車は入っていく。運転士は目でその先端を追いかけるが、電車を慎重に滑り込ませる。ホームの真ん中あたりまできて、ようやく前方すべてが視界に入った。ちょうど対向電車が乗客をホームに吐き出したところだ。ラッシュタイムのざわついた駅の雰囲気、走る電車の中にもわずかに伝わってくる。

電車が静かに停止すると、トンネルにはなかった人いきれがたちまち運転席にも入ってくる。なまあったかい臭い。下車する乗客の動きが列車を揺すり、車体を支えるエアークラスが勢いよく呼吸する。

シッ、ハッ、シッ、ハッ、シッ、ハッ……。

彼は帽子をとり、髪を後ろにかき上げる。柔らかな髪、ツルンとした肌はまるで少年の

ようだ。二十五歳。運転歴一年。

発車合図がきた。計器パネルの信号灯は青になっている。しかし、すでに定時を六十秒ほど超過。

へ六十秒かあ、けっこうキツイな

彼はすばやくハンドルを引く。電車が軽くなったおかげで加速反応がいい。トンネルの壁の左手にあるPマークの標識が見えると同時に、彼はグングンとスピードを上げる。制限速度の七十五キロまでいっきに。しかし、それを一キロたりとも超えないように神経を集中させる。彼は制限速度に対して、ことのほか神経質だ。

へもしも制限速度をオーバーし、自動制動装置が働いて、勝手に急ブレーキなんかかけられてはたまらない。そんなことになったら、きつと死にたくなる

速度が上がるとレールがキュルンキュルンと独特のきしり音で鳴いた。前照灯の光がダークブルーの闇を開放していく。

遠くの軌道上に、揺れる二つの光を発見。くつきりと浮かび上がった光は、電車の前照灯に弾かれるように柱の陰に逃げこんだ。彼にはそれが保線作業員の蛍光服だと分かっていた。ホイッスルを一度吹く。できるだけ柔らかに。